

『田ノ口古墳』

田ノ口小学校の東側の溪流のそばの山すそに、約100m²ぐらいの竹で囲まれた平地があります。

国道から3〜4m登れば田ノ口古墳に着きます。入り口に「高知県史跡田ノ口古墳」という碑があります。



管理は田ノ口小学校にもご協力いただいています。

※昭和28(1953)年高知県および黒潮町文化財指定。

■古墳の概要

田ノ口古墳は横穴式石室古墳です。

明治40(1907)年、土地の有者・松田徳治が畑地開墾中に発見したものです。古墳時代後期(6世紀末)のもので、黒潮町唯一の古墳です。

発見以来損傷されて全貌は完全には残っていません。墳丘は円形だったと思われますが、羨道(玄室に通じる道)は破壊しつくされ、玄室(棺を納める部屋)のみ残されて原形は失われています。

【玄室】奥行 1・63m

中央幅 1・25m

入口幅 1・38m

玄室の入り口は、西南の旗山神社の方向を望んでいます。

副葬品は散逸して不明ですが、黄色の瑪瑙の曲玉が出土していたといわれています。

■葬られていた人

古墳の西南方面には、蛸瀬川をへだてて旗山神社の森があり、真南の方向には馬野々平野が広がっています。

弥生時代には、人々は河川の流域に定住して農業を主とするのが一般的となりました。黒潮町でも蛸瀬川流域の水利の便のよい田の口地域は、その時代からの稲作地帯として集落が形成されていたと思われ、この古墳はこの地域の支配者の墓と考えられます。

■田ノ口銅山跡

上田の口地区を流れる蛸瀬川は、土佐くろしお鉄道「西大方駅」のやや西側で、羊歯の川と合流しています。

その2つの川に囲まれた北西側に連なる山が、かつて「田ノ口銅山」として銅を採掘した地域です。

バス停「田ノ口森」の北側の銅山橋を渡り、「銅山谷」といわれる地区の入り口の広場に、小さな丸石の墓があります。

この墓は、昭和36(1961)年に建てられた比較的新しいものですが、銅山の採掘に関係し犠牲になった人たちも合祀してあるそうです。

地区内の「銅山谷川」に沿って北側に登った山に本坑跡が数坑、その東の谷に2坑、西の谷に数坑、また丸山にも梅の木坑があるという事です。(町史によれば坑道口は12本。)

この銅山の歴史は古くて長く、江戸時代の藩宮から最後の昭和鉱業による発掘(昭和11年〜同12年)まで230年余り、そのうち実際に発掘された年数も70年余りに及んでいます。



銅山谷の入口にある墓

土地の古老の話では、銅山が一番栄えた頃(明治時代)には300人ほどの人が働いており、地区には旅館、料亭、診療所、駐在所まであったといわれています。